

光村図書 ウェブサイトのご案内

「美術準備室」を創刊してから、丸4年が経ちました。おかげさまで、多くの先生方にご愛読いただいております。

バックナンバーは、弊社ウェブサイトの会員専用コンテンツ「光村コミュニティ」にログインすると、PDF版をご覧いただくことができます。ぜひ授業にご活用ください。

広報誌「美術準備室」



中学校の美術教育に関するさまざまな情報をお届けしています。
年2回の発行です。
※最新号はログインせずにご覧いただけます。

8号	最新号	・抽象的な作品を感じ取る
7号		・うつくしい！をさがしにいこう 平成28年度版『美術』のご紹介
6号		・身近な対象から主題を生む

光村図書ウェブサイト> 光村コミュニティ> 中学校 美術 > 広報誌「美術準備室」

お詫び

検定中の申請図書に対する 不適切な行為について

先般、新聞等で報道されたとおり、弊社において、検定中に申請図書の内容の一部を教育現場の先生方に開示するという不適切な行為がございました。これは、文部科学省が定める規則（「教科用図書検定規則実施細則」）に違反する行為であり、文部科学省をはじめ、教育に関わる多くの皆様、国民の皆様に、教科書への信頼性に疑念を生じさせる行為であったことを深く反省いたします。

また、日々、教科書をお使いいただいている全国の先生方、児童・生徒、保護者の皆様に対して、多大なご迷惑をおかけしたことを心よりお詫び申し上げます。とりわけ、教科書の質的向上のために真摯に有益なご意見をたくさんお寄せいただいた先生方には、弊社の誤った判断により、取り返しのつかないご迷惑をおかけしてしまいました。重ねて深くお詫び申し上げます。

弊社では、今回の事態を重く受け止め、全役員、全社員が、教科書発行者としての重大な責任と使命感をもつとともに、二度とこのような過ちのないよう、再発防止策を早急に確立してまいります。

このたびは、誠に申し訳ございませんでした。

美術準備室 No.9

2016（平成28）年4月22日

発行人 ■ 小泉 茂
発行所 ■ 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話：03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■ Better Days (大久保裕文+深山貴世)
印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社



特集

新版教科書、 こう使う

アトリエ訪問
アニメーションディレクター

伊藤有壺

作家の肖像

板画家 棟方志功

放課後ART

●宮城県

仙台二華中学校・
高等学校

●大館

ふるさとキャリア教育

この1点

「南瓜」
斎藤 環

アトリエ 訪 問

粘土でできたキャラクターを、
少しずつ動かしながら撮影するクレイアニメーション。
伊藤有壱は、その世界の第一線を走り続けている。
イモムシが主人公の幼児向け番組「ニャッキ!」をはじめ、
CMやミュージックビデオ、短編劇場映画など、彼の手から、
実にさまざまな映像が生み出されている。その制作現場取材した。

撮影 永野雅子

第 9 回

伊藤有壱

アニメーションディレクター

横浜の港近くにある5階建てのど
っしりとした白い建物。以前は保税
倉庫だったその一室に、伊藤さんの
会社「I.TOON」がある。「どうぞ」
と笑顔の伊藤さんに招かれて中へ入
ると、コンクリートの壁には、撮影
用のセットが天井近くまでずらりと
並べられていた。

——思わず天井を見上げてしまいま
した。

伊藤 もともと倉庫だったため、天
井高が6メートルあるんです。床が
フラットで頑丈ですし、撮影スタジ
オにぴったりの空間ですよ。

横浜に会社を移して10年になりま
す。以前は東京にいたのですが、作

家性の強い仕事が多くなるにつれ、
創作するために、自分のベースをど
の地に置くべきなのか考えるように
なって。

——なぜ横浜だったのでしょうか。

伊藤 横浜で育ったこともあり、「ニ
ャッキ!」(NHK Eテレの幼児番組)
の物語を考えると、自然と横浜
の風景を思うことが多いんです。僕
の原風景がここにあるのかな。

それから、僕は英国のアードマン・
アニメーションズ(※1)に刺激を受け
て、クレイアニメーションに興味を
もつようになったのですが、同社の
創設者の一人であるピーター・ロー
ドさんに「自分の居場所は自分でつ
くるものだ」と言われたことが大き



これまでに撮影で使われたセットが壁一面に並べられていて圧巻だ。



「ニャッキ!」に使われるパーツ。粘土に埃が付かないよう、普段はラップなどで覆って保管。



粘土の汚れをきれいにするときや、指で触らずに物を動かしたいときは綿棒を使う。



左が「HARBOR TALE」の冒頭で使われたセット。右は映画会社のプロジェクトで使用されたもの。

く影響しています。

彼らは10代の頃にロンドンで会社を立ち上げて、その後、自分たちの生まれ育ったブリストルという港町に拠点を移しました。ブリストルという場所に誇りをもっていて、スタジオもスタッフもその地で年々成長している。「自分の居場所をつくる」ということは、自分一人でがんばることではない。アニメーションは、複数の人間で制作するから、“場”というのがとても大事なんだ」ということを、彼らから教わりました。僕が、仕事を横浜に移したのは、そういう理由もあったわけです。——教科書（『美術2・3』P37）では、伊藤さんのお仕事の様子をご紹介します。「ニャッキ!」が生

まれた背景を教えてください。

伊藤 ビジュアルエフェクツとコンピュータグラフィックスの仕事をしていた、当時は粘土に触ったことがなかったんです。でも、棒1本を動かすならなんとかなると思って（笑）、イモムシを主人公にした「ニャッキ!」を考えました。棒1本が動くことで、どんなドラマが生み出せるのか、観た人にどんな視覚体験を与えられるのかという、実験でもありました。

「ニャッキ!」のキャラクターは、1秒間に15回動かします。5分間の番組なので計4500回。スタジオに3〜4週間こもって撮影するのですが、なかなか地道な作業です（笑）。——スタジオに保管されている「ニ

ャッキ!」のパーツの数の多さから、もその大変さが伝わってきます。ここには、伊藤さんの作家としての代表作の一つ「^{ハーバー}^{テイル}HARBOR TALE」のセットも置いてありますね。

伊藤 「HARBOR TALE」は、横浜の赤レンガ倉庫から着想し、港町を舞台にした、レンガが主人公の作品です。この作品では、「ネオクラフトアニメーション」※2という新しい手法を提案しました。

僕は、アニメーションに未知の可能性を感じているんです。今も頭の中にアイデアはたくさんあります。でも、本当にうまくいくかどうかは現場に入ってみないとわからない。そこが苦しくもありますが、すごく楽しく、創造的だと思っています。

※1 アードマン・アニメーションズ
英国のアニメーション制作スタジオ。
クレイアニメーション「ウォレスとグルミット」や
「ひつじのショーン」シリーズの制作で有名。
※2 ネオクラフトアニメーション
I.TOONが提唱する、
アナログなアニメーションの要素に最先端の
デジタルの技術を融合させた手法。



「アニメーションには、まだ未知の可能性があると、
思うんです。」



いとう・ゆういち

1962年東京都生まれ。5歳より横浜で過ごす。
東京藝術大学デザイン科卒業後、SFXやCGのプロダクションを経て、
98年にアニメーション工房「I.TOON」を設立。
NHK Eテレの番組「ニャッキ!」の他、
CM、宇多田ヒカルや平井堅のPVを手がける。
2011年に「HARBOR TALE」を発表し、国内外の映画祭で
さまざまな賞を受賞。東京藝術大学大学院映像研究科
アニメーション専攻教授も務める。

特集 新版教科書, こう使う

平成28年度版教科書には、多くの新しい題材が入り、これまでに掲載していた題材については、よりパワーアップしました。今回は、それらを使ってどのような授業が考えられるか、4人の先生方にさまざまなアイデアをご紹介します。

撮影 鈴木俊介



提案 1 美術とのよい出会いを 山崎正明 (北翔大学教授・元北海道千歳市立北斗中学校教諭)

原寸大で鑑賞しよう かえんがたどき 火焰型土器

新版教科書の中でも、私が特に魅力を感じているのは、「原寸大で鑑賞しよう」です。この迫力ある題材で、どのような授業が生まれるのか楽しみです。

例えば、「火焰型土器」。生徒たちは、既に社会科で縄文土器を学習していますが、この大きな写真に、ま

ず驚くでしょう。

鑑賞するときには、土の粘土を生徒たちに触らせていただきたいと思います。そして、「粘土でこの土器の『部分』をつくってみよう」と投げかける。すると、生徒たちは粘土をこねながら、原寸大の図版を見てさまざまなことを考えるでしょう。「手先だけでこの形をつくるのは難しい。道具を使ったのかな」とか「こんなに手の込んだ模様をつくらうと思っ

たのはなぜなんだろう」と疑問をもち、当時の人々の気持ちや暮らしぶりまで想像するかもしれません。社会科で学習した内容と関連づけて、鑑賞を深めていくこともできると思います。

また、縄文土器はさまざまな場所で出土していますから、地元の土器を取り上げてもいいですし、可能なら、地元で採れた土の粘土を生徒たちに触らせるのもよいでしょう。



「土の粘土に触らせることで、より当時の人たちの思いに近づけるのでは」と山崎先生。

原寸大で鑑賞しよう 灰色のフェルト帽の自画像

ゴッホの「灰色のフェルト帽の自画像」については、鑑賞するとき、油絵の具とキャンヴァスを生徒たちに紹介したいですね。

多くの中学生は、油絵の具やキャンヴァスを扱ったことがありません。ですから、実際にそれらを使わせてみて、ねっとりとした質感や、木枠に布を張ったキャンヴァスの弾力を感じ取らせたい。その体験をすることで、描いた人の気持ちにより近づけるのではと思います。



原寸大で鑑賞しよう

作品の部分を原寸大でダイナミックに掲載。高精細な図版を細部まで見ることで、鑑賞がより深まり、自分の表現活動にも生かすことができる。



火焰型土器
『美術1』P42-43



灰色のフェルト帽の自画像
『美術2・3』P24-25



鳥獣花木図屏風
『美術2・3』P48-49



平螺鈿背円鏡
『美術2・3』P76-77

教科書は「いったりきたり」しながら活用してほしい。

そして、生徒たちには、油彩用の硬い筆を持たせ、図版の筆の動きをなぞらせてみたいですね。そうすることで、ゴッホの筆づかいを感じることができ、「なぜこんなにさまざまな方向に筆を動かして描いたのだろう」「どんな気持ちだったのだろう」「なぜこの色の上に、この色を重ねたのだろう」などと疑問をもち始めると思います。その声に耳を傾けながら、どんどん鑑賞を深めていけたらいいと思います。

また、教科書（『美術2・3』P24）には、ゴッホが使ったとされる毛糸玉が紹介されています。彼は毛糸を使って配色を考えていたと言われていますが、生徒たちにも同様に、さまざまな色の毛糸を触らせて、ゴッホの制作過程を追体験させてみてほしいかもしれません。「ゴッホはなぜこのような色を使ったのだろう」と、色づかいに疑問をもつ生徒に対しては、「学習を支える資料」の色相環（『美術1』P62）を見せると、



実際に筆でなぞってみると、ゴッホの筆づかいの巧みに驚くはずだ。

補色について学ぶよい機会になるでしょう。

鑑賞が深まっていくと、「ゴッホが生きた時代はどんなだったのだろう」と疑問をもつ生徒が出てくると思います。そのときには、「トピックス美術史」の印象派のページ（『美術2・3』P94）を見せて、印象派が生まれた時代背景やスーラの点描の作品などを合わせて紹介するとよいでしょう。新版教科書は巻末資料がとても充実していますので、教科書のページを「いったりきたり」しながら、美術への理解を深めていけるように使っていただきたいと思ひます。



螺鈿は表情豊かで繊細な素材。実際に手にすれば平螺鈿背円鏡の見方も変わるだろう。

原寸大で鑑賞しよう へい ら だん はい の えん きやう 平螺鈿背円鏡

正倉院の「平螺鈿背円鏡」では、やはり工芸品がもつ装飾の美しさ、精緻さを、生徒たちに味わわせたい。その手立てとして、実際に螺鈿を生徒たちに触らせるのもよいでしょう。安価なものだと数百円で売っているから、1枚購入して、グループごとに回して見せるとよいと思います。

螺鈿は光の当たり方によって表情が変わるので、その美しさを感じ取ってほしいですね。また、薄くて繊細な螺鈿を手にながら原寸大の図版を見ることで、当時の人々が、この素材を切り抜いて1枚1枚貼っていき、さらにそこに彫りを施していたことに、生徒たちは驚嘆するでしょう。つくった人に対して尊敬の念を抱くのではないのでしょうか。

見て描く楽しみ

それから、私は教科書の編集委員という立場から、「見て描く楽しみ」（『美術1』P8-11）という4ページ続きの題材をぜひ活用していただきたいと思っています。中学校のスタートで「美術って楽しいなあ」と生徒たちに感じてほしいという願いを込めて位置づけた題材です。

はがきほどの小さな紙に、自分のお気に入りのものを描くという題材なので、「1時間で何枚描いてもいいよ」と、気軽にやらせてみてほしいですね。画材としては、「透明水彩絵の具」をお勧めします。教科書（『美術1』P50）にも詳しく掲載されていますが、これを使うことで、気軽にさっと描くことができ、絵の具をより身近に感じるができるでしょう。

題材の中では、「みんなの工夫」として、生徒たちの制作過程をご紹介します。友達からアドバイス

をもらったり、色を試しながら描いたり……という制作中のさまざまな工夫を写真とともに詳しく掲載しているので、ぜひ授業の中で生徒たちに紹介していただきたいですね。

この題材では、全員で同じモチーフを描くのではなく、「お気に入りのものを描こう」としています。やはり好きなもののほうが、生徒たちは真剣に取り組めますから。私が以前、実際にこの授業をしたときは、教壇の前に、コップに生けた色とりどりの花をずらっと並べました。すると、美術室に入ってきた生徒たちが「わーっ!」「きれい」と、ぱっと笑顔になりました。そこで私はすかさず「お気に入りのものを家から持ってきた子はそれを描こう。お気に入りの花が見つけれなかった子は、この花を描いてもいいよ」と投げかけました。結果、お気に入りの

ものを描く生徒も、花を描く生徒も、明るい表情で意欲的に取り組んでいました。

美術室に花が並んでいたら、生徒たちは驚きますし、「中学校の美術の時間って楽しそうだな」とか「美術の先生って、おもしろそうだな」と、わくわくすると思います。ぜひ、最初の授業は導入を工夫し、生徒と美術との出会いをよいものにしていただきたいですね。きっと、新版教科書はその一助となることでしょう。（談）



やまざき・まさあき
北海道生まれ。北翔大学教授、元千歳市立北斗中学校教諭。北海道教育大学札幌校卒業。埼玉県で講師を務めた後、北海道の公立中学校教諭に。全国造形教育連盟事務局。自身のブログ「美術と自然と教育と」で、授業実践や生徒作品などを紹介している。光村図書中学校「美術」教科書の著作者でもある。

トピックス美術史 『美術2・3』P94-95

「印象派」「ジャポニズム」など、美術史に関連したトピックを取り上げている。

美術史用語

学習してほしい美術史用語を取り上げて解説している。



年表バー

わかりやすく整理した「美術史年表」を掲載。トピックの属した年代も表示している。

見て描く楽しみ 『美術1』P8-11

2ページで導入の内容、続く2ページで制作の手助けになるような内容を示した「4ページ題材」。



みんなの工夫

実際の授業で、生徒たちがどのように制作しているのか、発想から完成までの過程を、取材して掲載。



提 案

2

生徒と対話するきっかけに

柳沼宏寿 (新潟大学教授)

朝起きてから
夜眠るまでの美術

私が、美術の時間でいちばん大事にしているのは、生徒と対話することです。『美術2・3』の初めに位置づけられている「朝起きてから夜眠るまでの美術」は、生徒たちと対話するきっかけを生む、授業の導入にぴったりの題材だと思います。

全員でこのページを開いて、「朝起きたときに、みんなはまず何を見る？」と投げかけ、目覚まし時計のデザイン、パジャマの模様、歯ブラシの形など、自分の身近にあふれる美術について、振り返らせていきたいですね。

私は、この題材を表現活動にもつなげたいと思っています。「私の『朝起きてから夜眠るまでの美術』」と題して、教科書と同じように、生活の中で見つけた美術を、時系列で表現させたい。絵で描いてもいいし、

写真で撮ってきてもいい。同じ道を歩いて通学していても、生徒によって見えるものは違うでしょうから、その違いをみんなで交流したら、とてもおもしろい授業になるんじゃないでしょうか。

映像メディアを
活用する

私は長年、「映像メディアが美術教育に果たす役割」について研究しています。映像メディアに興味をもち始めたのは、中学校の教師をしていた頃のある出来事がきっかけです。なかなか美術に意欲を示さない生徒がいたのですが、ビデオで短いドラマを制作するとなった途端、彼は目を輝かせ、意欲的に取り組み始めました。映像メディアは、生徒の学習意欲や知的好奇心を引き出すきっかけになるかもしれない——そう思ったのです。

ただ、映画やドラマをつくるのは



「映像メディアを活用する」は、『美術2・3』の巻末に掲載されている。

大がかりになるので、まず、テーマを決めて短い映像をつくって、みんなで鑑賞することをお勧めします。例えば「赤色」「丸いもの」「川」など、何か一つテーマを設定し、そこから発想を広げていく。そのときには、ぜひ「学習を支える資料」の「映像メディアを活用する」(『美術2・3』P80-81)を、役立てていただきたいですね。写真や動画を撮影するときのポイントや機器の使い方が、実にわかりやすくまとめられています。

今は、スマートフォンやタブレット端末で、簡単に動画を撮影したり編集したりすることができる時代です。コマ撮りや逆再生ができる、おもしろいアプリケーションも開発されていますので(※)、それらを活用しながら、気軽な気持ちで、生徒たちと映像メディアを楽しんでいたいただけたらと思います。(談)



やぎぬま・ひろし

福島県生まれ。新潟大学教育学部教授。福島大学教育学部卒業後、福島県公立中学校教諭を経て、新潟大学教育学部准教授に。2012年4月より現職。美術教育における学びについて授業研究や地域連携アートプロジェクトを通して研究している。光村図書中学校『美術』教科書の著作者でもある。



朝起きてから
夜眠るまでの
美術
『美術2・3』P5-7

※さまざまなアプリがある中で、柳沼先生のお勧めは、『KOMA KOMA for iPad』(簡単にコマ撮りアニメーションが作れるiPad用アプリ)と、『逆転時間』(撮った映像を逆再生できるiPhone用アプリ)。



提 案

3

豊かな鑑賞のために

庄子展弘 (北海道上富良野町立上富良野中学校教諭)

特別展示室

風神雷神, 自然と人と

「風神雷神図屏風」(『美術1』P23-26)を鑑賞させる際、屏風の特性を生徒たちに感じ取らせたいので、実物大の複製を用意するようにしています。以前に、実物大の屏風を床に立て、教室を暗くし、ろうそくの光だけで鑑賞させたことがあります。生徒たちは床に座り、低い目線で屏風を鑑賞したのですが、ろうそくの炎がゆらめく中での授業は、とても盛り上がりしました。

しかし、作品の細部や色味をしっかり鑑賞するときには、教科書の図版を活用したいと思います。新版教科書は、屏風の「金色」にかなりこだわって印刷しているそうなので、生徒たちには、教科書の図版は実物の金屏風の色に近いということも話してあげたいですね。

屏風は置き方によって、表情を変えます。右隻と左隻を少し離して置いたり、入れ替えて置いたりすることで、見え方がぜんぜん違ってきますので、実際に屏風を動かして、そのおもしろさも体感させたいと思います。また、「自然とともにある日



実物大の屏風をろうそくの光で鑑賞したときの様子。教室に入った生徒からは歓声が上がった。

特別展示室
風神雷神,
自然と人と
『美術1』P22-27



本の美」(『美術1』P28)では、尾形光琳の「風神雷神図屏風」と、その裏に描かれていた酒井抱一の「夏秋草図屏風」が紹介されています。なぜ、風神雷神の裏に、まったく印象の異なる絵が描かれたのか。この題材を使いながら、屏風の表と裏の関係についても、生徒たちに考えさせたいと思います。

木のぬくもりと
暮らす

「木のぬくもりと暮らす」(『美術1』P38-39)では、木でつくられたバターナイフやスプーンなどが紹介されています。私は長年、「バターナイフの鑑賞」と題して、形の違う5種類の木製のバターナイフを生徒たちに実際に使わせてみるという授業を行っています。そのときに、このページを活用したいですね。

授業では、実際に食パンを焼いて、バターを塗らせ、生徒たちに5種類のナイフのうち、どれがいちばん使



特集
新版教科書,
こう使う



「バターナイフの鑑賞」で使う、さまざまなナイフ。「実際に使ってみることが大事」と庄子先生。

いやすかったか、なぜ使いやすく感じたのかを考えさせます。そして、そこで考察したことを基に、バターナイフの制作をさせます。教科書には、木工作家の言葉や生徒作品などが多く掲載されていますので、折に触れて生徒たちに紹介していきたいと思っています。(談)



しょうじ・のぶひろ

北海道生まれ。上富良野町立上富良野中学校教諭。北海道教育大学旭川校卒業。北海道ではいち早く対話による鑑賞に注目し、2004年の北海道造形教育研究大会で、「森の掟」(岡本太郎)、「刈田」(徳岡神泉)を題材として対話による鑑賞授業を、08年の美術による学び研究会で提言発表を行った。

発想や構想の能力を伸ばす

鈴野江里 (元横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校教諭)

「うつくしい!」

私は、「発想や構想の能力」を育てることをとても大事に考えています。もちろん創造的な技能も大事ですが、「発想や構想の能力」は、生徒たちが将来どんな仕事についても、必ず役に立つと思うからです。

その力を育てるため、生徒たちに「発想ノート」という A 5 サイズのスケッチブックを持たせています。自分が「美しい」と思ったものを記録させたり、制作のアイデアをかき留めさせたりするノートです。

1 年生の最初、このノートを生徒たちに配るときには、「うつくしい!」(『美術 1』P2-3)を紹介したいと思います。この詩を鑑賞することで、美術がどういう教科なのか感覚的に伝えることができますし、「自分の周りにある美しいものを集めよう」と投げかけ、「発想ノート」の活動につなげることができます。学習指導書の付属 DVD には、この詩の作者・谷川俊太郎さんが朗読した動画も収録されているので、合わせて紹介したいと思います。

「発想ノート」を使って、日常的に「美しいもの集め」をさせていますが、長期休みの前には、「季節の『美しいもの』を集めよう」と課題を出し、休み明けにノートに集めたものをグループで交流させることもあります。また、「商品パッケージをデザインする」という学習をするときに、導入として「自分の周りの気になったパッケージを集めよう」と課題を出し、ノートに集めたものを表

発想のための
スケッチブック
三沢厚彦
『美術1』P46-47



生徒たちの「発想ノート」。
写真やメモだけでなく、布や貝殻を貼る生徒も。

現活動につなげることもあります。大事なのは、集めたものが生かせるような題材を設定すること。また、教師がノートを厚くさせることばかりにこだわらないことも大事です。ノートはあくまで生徒たちの思考や過程を見るためのもので、作品ではありませんから。

発想のためのスケッチブック
み さ わ あ つ ひ こ
三沢厚彦

2 年生になったら、「発想ノート」の内容をより深化させたいので、三

沢厚彦さんのスケッチが描かれたノート(『美術 1』P46-47)と、学習指導書の付属 DVD に収録されている三沢さんのインタビュー動画を見せたいと思います。三沢さんは普段からノートを持ち歩き、そこにスケッチすることで、自分の考える動物「らしさ」を探っているそうです。そういう作家の考え方や生き方が、作品として表現されていることを教えたいですね。そこに気づくことで、生徒たちの「発想ノート」がより豊かなものになり、「発想や構想の能力」を伸ばす一助になるのではと考えています。(談)



すずの・えり

神奈川県生まれ。和光大学人文学部芸術学科卒業。元横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校教諭。教育課程研究指定校(国立教育政策研究所、平成25年度指定)、教育課程研究協力校(国立教育政策研究所、平成25～27年度)の教科主任として研究を推進。授業美術実践研究会の事務局も務める。

新版教科書、
こんなふうに使ってほしい



上野行一
うえの・こういち

大阪府生まれ。「美術による学び研究会」会長。高知大学大学院教育学研究科教授、帝京科学大学教授を務める。『五感をひらく10のレッスン』(美術出版社)、『私の中の自由な美術』、『風神雷神はなぜ笑っているのか』(光村図書)など著書多数。NHK高校講座「芸術(美術I)」を監修。光村図書中学校「美術」教科書の著作者でもある。

授業提案を読んで

火焰型土器を鑑賞するときは材料(粘土)に触れさせ、ゴッホの絵画を鑑賞するときは図版の上に画筆を置きゴッホの筆の動きをなぞらせる。山崎先生からは、目で見ただけではなく、実際に作者の制作過程を追体験させる授業提案をいただきました(P5-6参照)。このような体験的な鑑賞が表現と密接に関係していることは言うまでもありません。

その具体的な例として、庄子先生からはバターナイフの制作の前に、実際に食パンを焼いてバターを塗り、どんなバターナイフがいちばん手になじみ、使いやすいかを体感させるという授業提案をいただきました(P9参照)。

お二人の授業提案に共通しているのは、経験を通して鑑賞させるということです。図版を見るだけでなく、制作過程を追体験してみたり、実際に使ってみたりして、作品を自分のものとして捉えることによって鑑賞が深まり、表現もまた深まるのです。

鈴野先生からは発想・構想の能力を育てるために「発想ノート」を持たせ、日常的に「美しいもの集め」をさせる提案をいただきました(P10参照)。提案にあるように「日常的に集めさせる」というところが大切です。授業が始まってから「さあ発想しよう」と促したり、発想のためにノートを開かせるのではないのです。日頃から世界に向けて発想のアンテナを鋭敏に張り巡らせておくことが大切なのだと、鈴野先生は指摘されているのです。それが表現のた

め、美術のためだけでないことは明白でしょう。

柳沼先生もまたテーマを設定して素材を集め、そこから発想を広げて映像をつくって鑑賞する授業提案をされています(P8参照)。「朝起きてから夜眠るまでの美術」についても、自分の身近にあふれる美術について日常的に振り返ることが大切であり、そのためには普段から自分の生活や社会に向けてアンテナを張ることが大切なのです。

さて、新版教科書には充実した巻末資料があります。材料・用具・技法のページから色彩に関するページ、発想に関するページ、美術史に関するページなど、学習を支える資料が満載です。題材ごとに必要な資料を参照することはもちろん、鑑賞や表現と色彩の理解を関連づけた学習や、鑑賞から美術史に展開する学習などさまざまな教育計画の策定に役立てることができます。題材のページと巻末資料ページとを「いったりきたり」して有機的に活用してください。ページ右下にある➡はそのよい手がかりとなるでしょう。

新版教科書は「なぜ人間は、何かをうつくしいと思うんだろう?」という問いかけから始まります。これは生徒一人一人に向けられた問いかけに他ならないのです。中学校3年間の学習を通して自分なりの答えが形づくられるようにしたいものです。

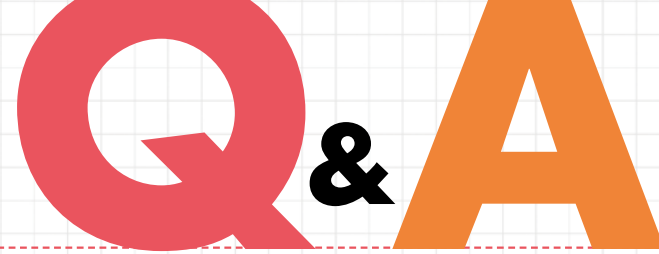


特集
新 版 教 科 書、
こ う 使 う



特集
新版教科書、
こう使う

新版教科書



授業で十分に教科書をご活用いただけるよう、
さまざまな工夫をしています。
その一部をQ&A形式でご紹介いたします。

Q1 道徳教育とは、どのようなところで関連を図っていますか。

A1 各題材で、道徳学習に関連する内容を積極的に取り入れました。

各題材には、「他者への思いやり」「人権」「平和」「伝統文化」「自然」「環境」など、道徳の学習に関連する内容を積極的に取り上げています。特に、道徳の学習と関連して扱うことができるページの左下には、「道徳との関連」マーク♥️を示しています。

これにより、生徒は道徳の時間に学習したことを思い出したり参考にしたりして、学習を進めることができます。また、教科書に対応する年間指導計画例にも、道徳との関連欄が示されていますので、授業の計画を考える際に参考にしてください。



特に道徳と関連する題材の左下には、道徳との関連を示すマーク♥️と、道徳の時間に学習したことを想起させるような文章を入れた。

東日本大震災を受けての美術の取り組みや生徒作品を紹介し、困難な状況にある他者に寄り添い思いやる美術の例を示した。

Q3 生徒の発想や構想の能力を高めるために、どのように工夫していますか。

A3 生徒自らが発想を広げたり構想を練ったりする際の参考になるヒントを、随所に設けました。

「表現中心の題材」には適宜、「発想・構想のヒント」マーク★️を示し、生徒が発想を広げたり構想を練ったりする際のヒントとなるように工夫しました。また、各領域の節目には、4ページ続きの題材を設けています。生徒の学習意欲を引き出すような作品や図版を多く掲載するとともに、生徒の発想・構想を紹介する「みんなの工夫」を新設しました。

また、巻末の「発想のためのスケッチブック」では、作家やデザイナーなどの発想・構想のしかたを各冊1名ずつ紹介し、生徒自らが発想を広げたり構想を練ったりする際の参考になるようにしました。

季節感のある暮らしを楽しむ
『美術2・3』P64-67



電球のマーク★️で、「発想・構想のヒント」を示している。「みんなの工夫」では、男女1名ずつの生徒の制作過程を掲載し、異なる発想を示すことで、生徒が安心して自らの表現を追求できるように配慮した。

Q2 技法や用具は、どのように扱われていますか。

A2 さまざまな基本的な技法を「学習を支える資料」として巻末にまとめました。

『美術1』の「学習を支える資料」では、「鉛筆やペンで描く」「絵の具で描く」「さまざまな技法で描く」「粘土でつくる」などの基本的な技法をまとめて紹介しています。3年間を通して生徒が必要に感じたときにいつでも参考にできるように工夫しました。

メディアを活用する」「金属や石でつくる」など、各題材と関連する技法を掲載しています。

また、「表現中心の題材」の中で、「学習を支える資料」に関連する題材には、ページ右下に「巻末資料へのリンク」マーク➡️を示しています。生徒が表現活動に取り組む際に参照できるようにしました。



学習を支える資料
鉛筆やペンで描く『美術1』P48-49

Q4 色の学習資料については、どのように工夫していますか。

A4 色相環の掲載のしかた、色名の表記などを工夫しました。

『美術1』の巻末に掲載している色相環は、観音開きを利用して、いつでも引き出して参照できるように工夫しています。すべてのページに対応させて、色相環と比べながら作品を鑑賞することができます。

また、色相環には、一般財団法人日本色彩研究所のPCCSの表記にのっとり、12色すべてに色名を入れて、色覚特性のある生徒が文字でも色を覚えられるように配慮しました。



学習を支える資料
色と光の特徴を知ろう『美術1』P60-62

その他の工夫については、弊社のウェブサイトでご紹介しています。
「光村図書ウェブサイト」> 中学校美術 > 教科書Q&Aをご覧ください。

作家の肖像

第 9 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。

撮影 土門 拳



棟方志功

1903-1975

むなかた・しこう
1903年青森県生まれ。板画家(棟方は自身の版画を「板画」と表現していた)。尋常小学校卒業後、仕事の傍ら油絵を独学。24年に上京し、28年に帝展で油絵「雑園」が初入選。以後、版画を始め、36年に国画会展に「大和し美し」を出品し柳宗悦らと出会う。56年にヴェネチア・ビエンナーレで日本人初の国際版画大賞を受賞。69年に青森市名誉市民賞を受け、翌70年に文化勲章を受章。享年72歳。

純粋なエネルギー

はん が むなかた しこう
板画家・棟方志功さんは、私の師・
土方定一(※1)と親交があり、一度お
会いしたことがあります。

晩年、志功さんが大病を患って自
宅で療養されていると聞き、私はお
見舞いのメロンを二つ抱え、棟方家
を訪れました。玄関先で、土方から
預かった伝言とメロンを手渡すと、
志功さんは「ありがとう、ありがと
う」と言っ、私を抱きしめてくれ
ました。病で瘦せた身体とその体温
だけが、鮮烈に印象に残っています。

志功さんは、いつもそうやって感
情を全身で表現する人でした。私が
勤めていた神奈川県立近代美術館で
講演してくれたときは、身振り手
振りで話し、聴衆を魅了していまし
た。しかし、決して能弁なわけでは
ない。津軽弁で聞き取りづらく、と
きどき、感情が高ぶって口をつぐん
でお祈りをすることもあります。し
かし、それが逆に、聞く者の心にす
っと入ってくる。彼の純粋なエネル
ギーが、人々の心をつかむのだと思
います。

ある種の「宗教者」

志功さんは、青森の鍛冶職人のも
とに生まれ、15人兄弟だったため、
貧しい環境で育ちました。絵が好き
で、小学校卒業後は働きながら絵を
描き続け、18歳のときにゴッホの作
品を見て衝撃を受けて、「わだば(私
は)ゴッホになる」と決意した……
というのは有名な話です。

彼は生まれつき目が弱く、何かを
じっくり観察して写實的に絵を描く
ことができませんでした。その弱点
を自覚し、また、川上澄生(※2)の作
品との出会いや、尊敬するゴッホが
浮世絵を高く評価していたことなど
から、25歳の頃に木版画を自分の表
現にすることに決めます。

志功さんが版画を彫る姿は、一種
異様です。顔を板に極限まで近づけ、
恐ろしいスピードで彫刻刀を走らせ
る。私は、彼が自分の意思だけでな
く、何か大きなものに急ぎ立てられ
て彫っているような気がしてなりま
せん。彼は自叙伝『板極道』で、「こ
ころの中に美が祭られているのだ。
それを描くのだ」と述べています。

自分の内的な世界を表現するために、
念じるように板を彫り、その作品を
紙に刷って多くの人々に頒布する
——私には、彼がある種の「宗教
者」のように感じられます。

自分の言葉をもつ人

志功さんの作品でいちばん好きなのは、やはり「二菩薩釈迦十大弟子」。
圧倒的な力をもつ大作です。

彼の作品には、詩や言葉が刻まれ
ていることが多いのですが、彼自身
が紡ぐ言葉もまたすばらしい。先に
述べた『板極道』は、自叙伝の傑作
で、彼の半生が、生き生きとした文
体で綴られています。志功さんは、
宮沢賢治のような独自の言葉をもっ
た人です。彼の言葉に触れることで、
棟方作品が、より広がりをもって感
じられることでしょう。(談)

※1 土方定一(1904-1980) 美術史家・美術評論家。
神奈川県立近代美術館館長として一時代を築いた。
※2 川上澄生(1895-1972) 版画家。
絵と詩が共生する作品は、棟方に多大なる影響を与えた。

酒井忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』教科書の代表著者。



上／「歓喜自板像・第九としてのもの欄」
木版彩色 1 冊 47.7×37.5cm 1963年
左上にはゴッホ、右上にはベートーヴェン、中
央上には、敬愛する柳宗悦の墓。そして、身の
回りには、親交の深かった河井寛次郎らの作
品が並べられ、寝転がっている自身の右手は、
チャ夫人とつながっている。60歳のときに
制作した自板像。(棟方志功記念館蔵)

下／「二菩薩釈迦十大弟子板画欄」(1～8)
木版 12 冊 各101.5×38.0cm 1939年
等身大の仏画を制作したいと考えていた棟方
は、興福寺の須菩提像を見て感激し、釈迦の弟
子たちと二菩薩を制作。この生命感あふれる
傑作は、サンパウロとヴェネチアの両ビエン
ナーレで受賞し、棟方の名を一躍世界へ知ら
しめることとなった。(棟方志功記念館蔵)



美術部へようこそ! 宮城県仙台二華中学校・高等学校

中高一貫校である、宮城県仙台二華中学校・高等学校。
毎年、1年間の活動を振り返る展覧会を開催しています。その模様取材しました。

熱意あふれる展覧会

「無料の展覧会です、ぜひお立ち寄りください」。生徒たちの元気な呼び声に誘われて展示室に入ると、ずらりと並んだ力作に目を奪われる。これは、仙台二華中学校・高等学校の美術部が、市内にある公共施設「せんだいメディアテーク」で毎年、年度末に開催する「二つ展」という展覧会だ。一つ一つの作品に力があるのはもちろん、展示のしかたも実に工夫されている。

「美術部が1年間に制作した作品を時系列で展示しています。単調にならないよう色合いに気を配ったり、足を止めてもらえるようにレイアウトを工夫したりと、細かいところまでみんなで相談しながらつくりあげました。さらに今年は映像を流したり、書道部とコラボレーションした作品を展示したりと、新しいことにも挑戦しています」と話すのは高校2年生の部員Kさん。

確かに、展示室に入っただけのスペースでは映像作品が流されており、来場者の多くは、まずそこで足を止める。生徒たちが「黒板アート」を制作する過程を早回しするという映像なのだが、観た人から思わず「すごい……」という声もれるほどの力作。書道部との合作では、書いてほしい言葉を美術部が依頼し、その書を、美術部がレイアウトしてダイナミックな作品に仕上げた。

また、展示室を歩いていると、生徒たちが「この作品は……」と、にこやかに解説してくれるので、まったく飽きることがない。ついつい長居してしまう展覧会だ。来場者からは「中高生の作品とは思えないほど見応えがあった」「作品に圧倒された」「がんばってほしい。応援したい」などの感想が寄せられていた。

生徒たちを精一杯褒める

この「二つ展」の歴史は長い。同校が中高一貫校になったのは6年前だが、この展覧会は前身の宮城県第二女子高等学校の時代から始まり、40年以上の歴史をもつ。今より小規模で開催されていたそうだが、中高一貫校になったことを機に、中学生・高校生がいっしょに作品を展示する今のスタイルになった。

「私がこの学校に来たのは中高一貫になって2年目のときですが、当時は、部員が8名しかいませんでした。でも、このような展覧会を開催したり、文化祭などで普段の活動を外に向けて発信していったり、おもしろそうな生徒がいたら、私が直接スカウトしたりして（笑）、徐々に部員が増え、今では中学生が15名、高校生が25名にまでなりました」と話すのは顧問の鈴木雅之先生。部活動を盛り上げていくコツは？と尋ねると、「生徒たちを精一杯褒めることと、『こんなことをしてみたいんだけどなあ』と、ちょっとだけ『無

茶振り』をしてみる」と笑った。

中高一貫校ならではのよさ

その先生の振りに応えるのが、高校生の部長のHさんと、中学生の部長のT君だ。「部員数が多く、みんなでさまざまなアイデアを出し合えるのがいい。想像を上回る作品ができることが多いんです。また、こういう展覧会があると、みんなが一つになれる気がします」とHさん。「展覧会では、中学生の活動時間が限られているため、高校生が中心となって会場の設営をしてくれました。先輩の姿から学ぶことは多い」とT君。中学生は、設営に時間が割けなかったぶん、当日の受付や来場者の接客、ライブペインティングの準備などを精力的にこなしていた。部員たちは非常に仲がよく、みんなで意見を交わしながら展覧会を運営している姿を見ていると、上級生・下級生の区別はない。

「絵を描いたりする技能は高校生のほうが優れているかもしれませんが、発想については、中学生のほうがざらりと光るものをもっていたりする。年の離れた先輩・後輩と学び合えるのが中高一貫校のよさ。お互いを認め合って尊重できる仲間になりたい」と鈴木先生は言う。

展覧会場で、お互いに助け合いながら、きびきびと働く生徒たちの笑顔を見て、先生の思いは届いていると感じた。



放課後 第9回 ART



- 1/ 生徒たちは明るい声でお客さんを呼び込む。客足は途絶えず、いつもにぎやかだ。
- 2/ 「黒板アート」の映像をじっと見つめる来場者たち。
- 3/ 書道部とのコラボレーション作品は、会場の壁を使って大胆にレイアウト。
- 4/ 「その色いいね」「ここはもっと重ねて塗ろう」。声をかけ合いながらライブペインティング。
- 5/ 受付では、パンフレットの配布とポストカードの販売を行う。

教室を飛びだして

おおだて 大館ふるさとキャリア教育

秋田県大館市の伝統工芸、大館曲げわっぱ。
市内の子どもたちは、曲げわっぱの工房を訪れて制作体験をしたり、
職人から直接話を聞いたり、さまざまな活動を通して、
地元の伝統工芸に親しんでいます。その活動をご紹介します。

誇るべき工芸品

「大館曲げわっぱ」は、秋田県を代表する特産品の一つであり、経済産業大臣により伝統的工芸品に指定されている。その歴史をひも解くと、江戸時代にまでさかのぼる。関ヶ原の戦いに敗れ大館城主となった佐竹西家が、豊富な森林資源を利用し、武士に副業として奨励したのが始まりだ。困窮する領民には、年貢米の代わりに原木の運搬を命じたといわれる。

曲げわっぱは、天然秋田杉を薄く剥いて熱湯につけ、柔らかくなったから巻き込むように曲げて成形していく。木材の継ぎ目にとじ穴を空け、サクラの皮で縫い留める。均等な柁目を生かしたシンプルな美しさがあり、食器類に多用されている。秋田杉の吸湿性によってご飯がおいしく感じられ、弁当箱として愛用する人も多い。また、現在では、コーヒーカップや照明器具などさまざまなものにアレンジされて、制作されるようになった。

ふるさとに根ざした教育

市では「ふるさとキャリア教育」
(※)の一環として、子どもたちを対

象に、この歴史ある伝統工芸に親しんでもらうためのさまざまな取り組みをしている。

例えば、大館曲げわっぱ協同組合に協力を仰ぎ、各工房で、制作体験を実施している。子どもたちは、曲げわっぱが制作される現場を見学し、職人に教わりながら、杉の薄板を加工して制作する。実際の工房で「本物」に直接触れることで、地元の工芸品に対する関心を高め、地元への愛着や誇りを醸成することがねらいだ。

曲げわっぱの魅力を実感

また、市内の中学校では、美術科の授業で、この伝統工芸を取り上げること多い。

大館市立田代中学校では、曲げわっぱそのものをじっくり鑑賞した後、伝統工芸士の話を聞くという授業を行った。曲げわっぱを知っていても、実際に使ったことがない生徒は多い。そのため授業では、ご飯を入れて試してみるという体験をさせ、素材のなめらかさや軽さ、温かみ、香りなどのよさを感じ取らせた。生徒たちには、「用の美」も体感させることができたようだ。

その後、伝統工芸士が制作実演を

行い、曲げわっぱの成り立ちや、デザインの工夫、形の美しさ、手づくりのよさなどを、職人の立場から語った。「曲げわっぱになじみがなかったが、よく知ることができて、今は身近に感じる」「歴史を感じた。大館の人たちが曲げわっぱを大切にしてきたんだと感じた」「自分用の欲しい！」といった感想が出され、生徒たちは地元の伝統工芸の美しさや価値を改めて感じるようになった。職人の技を間近で見ることができたのも、貴重な体験となったことだろう。

市をあげて、積極的に子どもたちへ地元産業の魅力や優れた特産物、伝統的工芸品、文化遺産を伝えていくことは、将来子どもたちが地域に根ざし、地域を支えていこうとする意欲につながる。曲げわっぱの制作体験を含めた「ふるさとキャリア教育」の取り組みを通して、活気あふれる地域の基盤が築かれつつある。

※ふるさとに生きる基盤を培う「ふるさと教育」とその基盤の上に自らの人生の指針を描く「キャリア教育」を融合した大館市独自の教育理念。「ふるさとキャリア教育」については、下記のサイトで詳しく紹介されている。

大館ふるさとキャリア教育
<http://www.city.odate.akita.jp/dcity/kyokenkyu/11-7371.html>



- 1/ 優れた吸湿性に加え、弁当箱自体が軽いので、持ち運びやすい。
- 2/ 伝統工芸士の技に見入る生徒たち。
- 3/ 曲げわっぱの制作工程を体験。職人に直接指導してもらう。
- 4/ 器を実際に使って、形の美しさ、素材の特徴などを感じ取る。
- 5/ 職人の工房の様子。実際に工房を訪ね、その現場を見ることで、曲げわっぱへの愛着がより深まる。



放課後
ART



第 9 回

南瓜

くさ ま やよい
草間彌生

ガラス繊維強化プラスチック他 高さ200cm 1994年
香川県直島町 ベネッセホールディングス蔵(岡山県)

※「美術2・3」P96に掲載

自己消滅という自己表現

「南瓜」は不思議な作品である。具象でありながら抽象的であり、パターンの繰り返しは模様のようにも見える。大小の水玉が独特のリズムを生み出し、2色のシンプルきわまりない作品なのに、いつまでも見飽きることがない。

これを制作した草間彌生は、水玉に取り憑かれた作家である。この作品に限らず、彼女の作品の至るところに、無数の水玉がちりばめられている。

草間は、1929年に長野県松本市の旧家に生まれた。幼少時から、目の前に同じ模様のパターンが広がって見え、植物が話す言葉を聞くといった幻覚があった。彼女はその後「統合失調症」と診断されて、現在も治療を受けながら、精力的に制作を続けている。

通常であれば社会生活をさまたげる病の存在が、草間の制作には欠かせないものとなった。ある精神科医が彼女の作品を高く評価し、その後彼女は渡米して作品制作に勤しんだ。帰国してからもその創造性は衰えることを知らず、いまや草間は日本を代表する現代美術作家として国際的な評価も高い。

ならば、彼女には世界はどのように見えているのか。

「部屋じゅう、身体じゅう、全宇宙が赤い花の形で埋めつくされて、ついに私は消滅してしまう。そして、永遠の時の無限と、空間の絶対の中に、私は回帰し、還元されてしまう。これは幻でなく現実なのだ。私は心底から驚愕した。」(『無限の網 草間彌生自伝』)。

南瓜は彼女のお気に入りのモチー

フだ。どこかユーモラスな造形のこの野菜に、彼女は「宇宙」を封じ込める。彼女は自らの「症状」をきっかけに、水玉の視覚効果を発見した。水玉で埋め尽くされた空間は、平面でありながら無限の奥行きがあり、地と図の区別が曖昧な迷宮となって視線を巻き込み、視る側の主体すらも溶解させてしまう。彼女はそれを“自己消滅”と呼んでいる。それは幻覚の苦しさから逃れるための表現だった。

自己消滅という自己表現。言葉の上では矛盾だが、彼女にとって両者はひとつのものだ。それゆえ「南瓜」を観ることは、ひとを「鑑賞」という受け身の立場にとどめない。そのとき私たちは、すでに草間の「創造」のプロセスに招待されているのだ。

斎藤 環
さいとう・たまき

精神科医。1961年岩手県生まれ。筑波大学医学研究科博士課程修了(医学博士)。爽風会佐々木病院等を経て、筑波大学医学医療系社会精神保健学教授。思春期・青年期の精神病理、病跡学を専門とする。漫画・映画・サブカルチャー全般に通じ、新書から本格的な文芸・美術評論まで幅広く執筆。著書に『社会的ひきこもり—終わらない思春期』(PHP新書)、『アーティストは境界線上で踊る』(みすず書房)、『生き延びるためのラカン』(ちくま文庫)など多数。